



「教育について工藤勇一先生に聞いてみた」工藤勇一監修より②

悩み3 内申書（調査書）を意識する必要はあるのでしょうか？

東大の中村高康教授が行った調査によると、**内申書（調査書）にどんなことが書かれるのかを意識して学校生活を送っている中学3年生が8割にのぼる**そうです。「いい生徒」と評価してもらうために生徒会に立候補し、教員にへつらい、授業中に積極的に手をあげる。「主体的でよいのでは」と思われるかもしれませんが、本当の主体性は大人に忖度して先回りすることではありません。

そもそも**内申書は志望校にその子を最大限にアピールするための資料**です。私が担任をしていたときは「内申書に君のどんな良さを書いてほしい？」と子どもに聞いていたものです。内申書フォーマットは都道府県によって異なります。中でも広島県教育委員会は先進的な取り組みをしています。**「先生にどう見られるかではなく自分でどう思うかが大事」**という理念から活動の記録を廃止。不登校の子どもの不安材料となる欠席日数も廃止しました。残っているのは「学習の記録」だけです。その代わりに公立高校入試当日の面接で自己アピールする機会（自己表現）を新たに設けています。このような取り組みが全国に広がりつつあります。

★自分が何をしたいのか、自分はどうしたいのか、自分はどう思うのかが大切！

悩み4 子どもの褒め方にコツはありますか？

子ども本来が持っている主体性を取り戻すには自己決定が大切ですが、**自己決定できるようになるには心理的安全性が欠かせません**。この、心理的安全性を高める方法の一つが褒めることです。しかしながら、「ほめ方」は実に難しいものです。「よく子どもを褒めているよ」と思っている方はぜひ一度、褒めた体験を振り返ってみてください。成績が伸びてえらい、優勝できてすごい、上手にできたね・・・と**結果を褒めていませんか**。

「結果」を褒められ続けられた子は壁にぶつかったときに「自分ではできない」と諦める傾向があります。成功に固執し難しいことを避けたり、得意なことに逃げてしまったりすることで、主体性を失う可能性があります。ポイントは、**成功したときも失敗したときも同じ温度感で、そこに至る「プロセス」を褒めてあげること**です。その積み重ねが、「失敗しても大丈夫」「チャレンジが認められる」という子どもの心理的安全性につながります。

結果ではなく、プロセスを褒めることは意外と難しいと思います。褒める視点は様々ありますが、日ごろから子どものチャレンジの様子をしっかりと観察する必要があります。プロセスを褒め続けられた子どもは、壁にぶつかっても「工夫不足だった。今度はこんな工夫をしてみよう」と努力するようになります。

★結果ではなく、そのプロセスを褒める → 心理的安全性 → 自己決定 → 主体性が育つ